

第四章 第二節 第五項

① 湯志鈞『戊戌变法史論叢』

内藤戊申「汪康年伝稿」

小野川秀美 前掲書

戈公振 前掲書

本論文第1章第2節

② 梁啓超「創弁時務報源委」(知新報第66冊 光緒24年8月11日所収)

中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 525頁

強学会停弁之後、穰卿即在滬度歲、康先生並招出滬改弁報以統會事。時同鄉黃公度京卿遵適在滬、公度固強学会同事之人、憤学会之停散。謀再振之、亦以報館為倡始；於是與穰卿及啓超三人日夜謀議此事。

③ 梁啓超『飲冰室文集』四 17頁

京師之開強学会也、上海亦踵起、京師會禁、上海會亦廢、而黃公度倡議統其餘緒、開一報館、以書見招、三月去京師、至上海、始交公度、七月時務報開、余專任撰述之役、報館生涯自茲始。

④ 汪康年、梁啓超等主編 前掲書一 表紙

⑤ 梁啓超「創弁時務報源委」

創弁時所出印公啓30條、係由啓超初擬草稿、而公度大加改定。

⑥ 汪康年、梁啓超等主編 前掲書一 199頁

⑦ 同前

⑧ 同前

⑨ 中国史学会主編 『戊戌变法』(四) 524頁

既而穰卿到滬、而京師強学会為言者中止、滬會亦因停弁。當時尚余銀七百余兩；又將原租房屋已交去一年之租銀、追回半年、得三百五十元；又將會中所置器物書籍等項變賣、得二百余元；共共得千二百金、實為時務報嚆矢。

⑩ 同前 524頁-525頁

⑪ 嚴復「致汪康年」(『汪穰卿先生師友手札』所収)

⑫ 同前

なお*印は、本名不明の者。

⑬ 汪康年、梁啓超等主編 前掲書一 表紙

⑭ 湯志鈞『戊戌变法史論叢』 249頁

国立国会図書館には、69冊全部が所蔵されている。

⑮ 湯志鈞『戊戌变法人物伝稿』 356頁-364頁 なお、「時務報緣起」には嚴復の名があるが、管見の限り、見ることができなかったのので省いてある。

⑯ 『時務報』第1冊 8頁

「变法通議」は、時務報第一冊から第四十三冊までに断続的に、21回連載されている。

窮則變變則通

- ⑰ 汪康年、梁啓超等主編 前掲書（一） 626頁－628頁
- ⑱ 同前（五） 2765頁－2769頁
- ⑲ 同前（一） 203頁－209頁
- ⑳ 同前（一） 556頁－559頁
- ㉑ 『時務報』第二十六冊から第三十四冊までに断続的に6回連載されている。
- ㉒ この表は、一応の目やすとして書いた。
- ㉓ 同前
- ㉔ 汪康年、梁啓超等主編 前掲書（一） 時務報録記
 斯報可貴之處、在其鼓吹變法思想之重要言論、且恰当戊戌時會、已醞釀多日、斯可考察當日思潮之動向、與論之要求、以及全國上下普遍之政治醒覺。
- ㉕ 湯志鈞『戊戌變法史論叢』
 內藤戊申 前掲論文
 小野川秀美 前掲書
 戈公振 前掲書
- ㉖ 中国史学会主編 『戊戌變法』（二） 349頁－351頁
- ㉗ 同前 44頁
 又論（內閣）：孫家鼐奏、遵議上海時務報改官報一摺、報館之設、所以宣國是而達民情、必必官為倡弁、該大臣所擬章程三條、均尚周妥、著照所請、將時務報改為官報、派康有為督弁其事、所出之報、隨時呈進。……
- ㉘ 湯志鈞『戊戌變法史論叢』
- ㉙ 戈公振 前掲書 124頁

第四章 第二節 第六項

- ① 『湘報』に関する史料、著書、論文の主なものに次のものがある。
- 梁啓超『戊戌政變記』
- 唐才常、譚嗣同等撰『湘報類纂』
- 梁啓超『清代學術概論』 台湾商務印書館 1969年
- 梁啓超著、小野和子訳『清代學術概論——中国のルネッサンス——』 平凡社 1974年
- 張之洞『張文襄公全集』 文海出版社 1963年
- 蘇輿編『翼教叢編』 台湾國風出版社 1970年
- 湯志鈞『戊戌變法史論叢』
- 湯志鈞『戊戌變法人物伝稿』上・下
- 鄧譚洲「十九世紀末湖南的維新運動」
- 湖南省志編集委員会編 前掲書
- 小野川秀美 前掲書
- 佐々木保子 前掲論文
- 戈公振 前掲書

王爾敏 前揭書

林能士 前揭書

本論文第1章第2節

② 唐才常、譚嗣同等撰前揭書緣起。

迨戊戌春、熊希齡等復鳩同志、集鉅資、創設報館、自二月起印行「湘報」(日刊)、以薪新之風格、繼時務報湘學新報之後、揭倡新學行新政為宗旨、……

③ 同前 485頁

本館購弁機器鉛字、均由同志集贊為之、專以開風氣拓見聞為主、非藉此謀生者可比。現蒙 撫憲提款津貼常年經費、故取值極廉、僅收工本紙張之費、無論貴賤貧富士農工商、皆可閱報。

④ 同前 486頁

津海各報、多訛西事、以求知彼、本報則首重知己、擬稟請 撫憲、凡京師各衙門、及各省督撫藩臬衙門行知咨文到湘、除機密公牘不得宣播外、所有文移、概求飭房錄稿、行札本館照登、至本省各衙門告示曉諭、應錄者、一同此例。

⑤ 同前 2頁

凡官焉者士焉者商焉者農工焉者、但能讀書識字、即可觸類旁通、不啻購千萬秘籍、萃什伯良師益友於其案側也、其使中國為極聰強極文明之國、吾於是決其必然矣、熊君秉三、喜民智之乍開、欲慈航之普渡、乃鳩同志、集巨贊、設湘報館、義求平實、力戒游談、以輔時務知新湘學諸報所不逮。

⑥ 同前 6-7頁

且夫報紙、又是非與眾共之之道也、新會梁氏、有君史民史之說、報紙即民史也、……吾見湘報之出、敢以為湘民慶、曰諸君復何憂乎、國有口矣。

⑦ 同前 486頁

⑧ 同前 緣起

譚唐二人操筆政

⑨ 同前 486頁

本報與學堂學會聯為一氣、凡各府州縣、窮鄉僻壤、不能購報者、應請各府州縣分學會友、查明市鎮村落總匯地名、函知本館註冊、酌計每處捐報數分、由省城總學會設法寄至各府州縣分學會友。……

⑩ 本論文第4章第2節第4項參照

⑪ 唐才常、譚嗣同等撰 前揭書 485頁

⑫ 同前 485-486頁

⑬ 同前 487頁

⑭ 同前

⑮ 同前

⑯ 同前

⑰ 同前

⑱ 同前

⑲ 同前

⑳ 同前

- ②① 同前 485頁
本館首載論說奏疏、次錄、電旨、次錄公牘、次錄本省新政、次錄各省新政、次錄各國時事、次錄雜事、次錄商務、如尚有余巾、即選刊政學新書於後、如所錄係選自他報者、仍將報名註出。
- ②② 湯志鈞氏の『戊戌変法人物伝稿』は、『湘報文編』により、56名の執筆者をあげ、中には楊子玉等、その論説数が本論文より多いものがある。しかし、論説内容の傾向は、『湘報類纂』で大体把握できると思われる。
- ②③ 本論文第四章第二節第三項参照
- ②④ 唐才常、譚嗣同等撰 前掲書 58-59頁
是何也、是蓋循法界虛空界衆生界、有至大至精微、無所不膠粘不貫洽不筦絡而充滿之一物焉。目不得而色、耳不得而聲、口鼻不得而臭味、無以名之、名之曰以太、其顯於用也、爲浪、爲力、爲質點、爲腦氣、法界由是生、虛空由是立、衆生由是出、無形焉、而爲萬形之所麗、無心焉、而爲萬心之所感、精而言之、夫亦曰仁而已矣。
- ②⑤ 同前 61頁
天下而無學會之名也、吾又奚敢爲此名、以擾天下、幸而強學會雖禁、而自餘之學會、乃由此而開、大哉學會乎、所謂無變法之名、而有變法之實者此也、……各以其學而學、即互以其會而會、……夫何憚而久不爲也、會成而學成、……於是無變法之名、而有變法之實。
- ②⑥ 同前 273頁。
今日之世界、鐵路之世界也、有鐵路則存、無則亡、多鐵路則強寡則弱、西人爲統計之學者、校稽環球各國鐵路之長短、列爲圖表、惟美國最長、惟中國最短、而各國安危盛衰之數、率以是爲差、
- ②⑦ 同前 274-279頁
- ②⑧ 本論文第四章第二節第三項参照
- ②⑨ 唐才常、譚嗣同等撰 前掲書 178頁
海內深識之士、怵心浩劫、倡大義於林林之衆曰、今策中國、宜開民智、伸民權、一民心、誠哉言矣、
- ③⑩ 同前 179-182頁
- ③⑪ 同前 71-77頁
- ③⑫ 本論文第四章第二節第三項参照
- ③⑬ 同前
- ③⑭ 唐才常、譚嗣同等撰 前掲書 緣起
- ③⑮ 張之洞「致長洲陳撫台、黃臬台」（張之洞前掲書卷一五五所収）
- ③⑯ 梁啓超著、小野和子訳 前掲書 270頁
- ③⑰ 湯志鈞『戊戌変法史論叢』250頁
文字較湘學報稍淺近。
- ③⑱ 湖南省志編集委員会編 前掲書 157頁 第二次修訂本 170頁
“湘報”發表了不少宣傳維新變法的論著、有一些措詞激烈、引起了頑固守舊分子的攻擊、……
- ③⑲ 小野川秀美 前掲書 295頁 第二次修訂本170頁
- ④⑩ 林能士 前掲書 67頁
「湘報」創刊後、与「湘學報」並爲當時湖南維新份子宣揚變法的主要言論園地。……

⑪ 唐才常、譚嗣同等撰 前掲書 縁起

故湘報発行雖偏於一省、実為保存戊戌維新運動最重要原料之一種

第四章 第二節 第七項

① 嚴復ならびに、国聞報に触れた、主な史料、文献には、次のものがある。

愛穎編『国聞報彙編、上・下』 西江欧化社 光緒29年

存萃学社編『嚴復思想旨探』 大東圖書印行 1980年

王栻編『嚴復集第1冊—第5冊』 中華書局 1986年

王栻『嚴復伝』 人物出版社 1957年

小野川秀美『清末政治思想研究』 東洋史研究会 1961年 みすず書房 1969年

Benjamin I. Schwartz, *In Search of Wealth and Power : Yen Fu and the West*,
Cambridge, Harvard University, Press. 1964

内藤湖南『内藤湖南全集第2巻』 筑摩書房 1971年

B. I. シュウォルツ著、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人——嚴復と西洋』 東京大学出版会

1978年

戈公振『中国報学史』 香港太平書房 1964年

島田虔次『中国革命の先駆者たち』 筑摩書房 1965年

伊藤秀一「進化論と中国近代思想」(『歴史評論123—4』 1966年所収)

高田 淳『中国の近代と儒教』 紀伊国屋書店 1970年

方漢奇『中国近代報刊史上』 山西人民出版社 1981年

有田和夫『清末意識構想の研究』 汲古書院 1984年

湯志鈞『戊戌変法』 人民出版社 1984年

孫成祥「關於『国聞報』的幾個問題」(『南京大学學報』(哲学社会科学)一九八四年第一期)、

手代木有児「嚴復『天演論』におけるスペンサーとハックスリーの受容」(『集刊東洋学』58号 1987年)、手代木有児「清末における「自由」—その受容と変容—」(『日本中国学会報』第40集 1988)

本論文第一章 第三節

② 愛穎編 前掲書 上一葉 王栻主編 前掲書 第2冊456—457頁

維新固佳。率旧更善。宣者自立。皆足利群。其言如此。此以見求益之事。会異親通。独難為功。衆易為力。彰彰明矣。

王栻氏は前掲書、第2冊456—457頁で次のように言っている。

維新守旧、折善而从。其説行、時也、其不行、亦時<也>、二者将各有所宜、而吾所能為、独无妄而已矣。其言如此、此以見民智之事、会異親通、独難為功、而众易為力也。不佞等被服儒術、遭遇清時、或少丁多難、遠涉瀛寰、或長識通方、悟茲求野。于旁行斜上之書、購人子弟之学、生有微尚、粗啓津涂、際此時艱、不敢自悶、愿从諸君子后、補苴一二焉。

③ 愛穎編 前揭書 上二葉一四葉 王棊主編 前揭書 第2冊45—455頁 才公振 前揭書145—147頁。
光緒廿三年之夏、館之主者、議創《國聞報》于天津。略仿英國《太晤士報》之例、日報之后、繼以旬報、越五月而后成事。報梓出、客有造室而問曰《國聞報》何為而設也？曰：將以求通焉耳。夫通之道有二：一曰通上下之情、一曰通中外之故。

本館取報之例、大要有二：一、翻摺；一、採訪。翻摺之報、若俄、若英、若法、若德、若美、若日本、若歐、墨其餘諸國。萃取各國之報、凡百余種、延聘通曉各國文學之士、凡十余人。採訪之報、如天津本地、如保定省会、如京師、如河南、如山東、山西、如陝、甘、新疆、如奉天、吉林、墨尤江三省、如前後藏、如內外蒙古；外國如倫（=倫）敦、如巴黎、如柏林、如森彼得堡、如紐約、華盛頓。訪事之地、大小凡百余處；訪事之人、中外凡數十位。

觀于一國之事、則足以通上下之情；觀于各國之事、則足以通中外之情。上下之情通、而後人不自私其利；中外之情通、而後國不自私其治。人不自私其利、則積一人之智力、以為一群之智力、而吾之群強；國不自私其治、則取各國之政教、以為一國之政教、而吾之國強。此則本館設報區區之心所默為禱祝者也。

④ 王棊 前揭書 427—428頁 方漢奇 前揭書 101—102頁

⑤ 戈公振 前揭書 147頁 王棊主編 前揭書 455—456頁

（一）本館出報兩種：日報每日印一張、計八開、用四號鉛字排印、名曰《國聞報》。旬報十日印一冊、約計三萬言、用三號鉛字排印、名曰《國聞彙編》。

（一）日報首登本日電傳上諭、次登路透電報、次登本館主筆人論說、次登天津本地新聞、次登各省新聞、次登保定、山東、山西、河南、陝西、甘肅、營口、牛莊、旅順、奉天、吉林、黑龍江、青海、前藏、後藏各處新聞、次登外洋新聞。至東南各省新聞、東南各報館言之甚詳、本館一概不述。

（一）日報另出附張、不取分文。先登告白、次登每日上諭、宮門抄、京外各衙門奏摺、四圍留空白、以便閱報諸君將來匯齊、裁訂成冊。

（一）毀謗官長、或訐隱私、不但干國家之律令、亦實非報章之公理。凡有涉于此者、本館概不登載。即有冤抑等情、借報章申訴、至本館登上告白者、亦必須本人具名、并有妥實保家、本館方許代登。如隱匿姓名之件、一概不登。

（一）日報每月售制錢三百文、旬報每冊售制錢一百五十文、一年計三十三冊、定閱全年者、每分售制錢四千文。外埠寄費、按照路之遠近、酌量加費。凡代本館經售各報者、其報資按八折計算、即以二成作為代售經費。但各代售之人、向閱報人取值、不得多于本館所定之數。

⑥ 王棊編 前揭書 方漢奇前揭書

⑦ 愛穎編 前揭書 上4—6葉 王棊主編 前揭書 465—468頁

西人之論物理者曰：凡物成形之後、若无別力加之、則此物永不變異。然天下之物、点点密移、前後相續、無間變易者、則以有阻力與離心力也。阻力者、如此物有欲行之方向、而有他力阻之使不行、或阻力四面俱生、亦可使本物受其極大之逼迫、而更其面目。離心力者、由万物極微合成、內具向心力、若失其互相吸引之性、而每点各相推拒、則可使本物失其形性、而化為烏有。此二力均能改物、而離心力尤甚。

夫中國之不可救者、不在大端、而在細事、不在顯見、而在隱微。

此病中于古初、發于今日、積之既久、疔之實難。无以名之、名之曰離心力而已。夫中國實情、其或有

不止于此者乎？或有不若此之甚者乎？非所知也。

⑧ 愛穎編 前揭書 上8—11葉 王栻主編 前揭書 468—471頁

中国四百兆人、婦女居其半；婦女不識字者、又居其十之九。即偶有一二知書者、亦不過以其余力、粗解詞章。物以罕而見珍、遂以通人自命。初不知所謂學問者、即人所以異于離禽獸之處。名既為人、即當學問、不以男女而異也。區區識數字、何足奇乎？

自中日議和之後、忱世之人、競言學校、近更于沪上創興女學堂。此後有志之女、若能努力、何患不能比迹于西人。一家无坐食之人、則家累輕；家累輕、而後人有余力以事其事。或者可以挽回頹俗、軀弱為強乎？虽然人之學問、非仅讀書、尤宜閱世。蓋讀書者、閱古人之世、閱世者、即讀今人之書、事本相需、不可廢一。

中国婦人、每不及男子者、非其天不及、人不及也。自《烈女伝》、《女誡》以來、压制婦人、待之以奴隸、防之以盜賊、責之以經賢。

……即歐洲之婦女、惟无妾一事、實勝泰東、其余則仍与男子不平等也。上不為伯里玺天德、中不為議員、下不為軍士、不過起居飲食、威議進止之間、男子均优待之耳。蓋同一不平等之待法、不開化之國、則欺凌弱者；而開化之國、則保護弱者也。嗟呼！雌雄牝牡之不齊、人乃非人、莫不若此、其由來遠矣、豈一朝一夕之力所能改哉！

⑨ 愛穎編 前揭書 上84—86葉

何謂國。有人民。有政治。有自主之權。有可以与天下並立之勢者。謂之國。有人民。無政治。不得謂之國。無自主之權。無可以与天下並立之勢。更不得謂之國。故保國宜以保其人民。保其政治。保其自主之權。保並立於天下之勢為第一義。

……海關之利權外人執之數十年。收歛百萬萬不開設一學院。培養海關之才以為他日計。國債一事。俄爭之。英又爭之。當事者不免有事齟齬楚之歎。築鐵路興礦務之事。俄德法並爭之。整卒旅練軍實之權。德爭之。俄又爭之。是中国失其政治矣。租界中領事治民之權。日本恥之。自奮卅年。而恥革。中国。則租界日闊。公使領事之權。日重。自主之權失矣。國與國相處勢可以並立。乃能免侵陵之禍。中国五十年來。再挫於英。敗於法而越南割。辱於日本而高麗失。迫於俄德而膠灣旅順拱手授人。瓜分之議復煽於今日。並立之勢失矣。四者失。則所以為國者皆失。謂之國亡可也。

……志士仁人痛種族之將殘。宗國之將滅。教化之權之將不能自有。倡為保國保教保種之議。股報紙。立學會。廣謀議。行人人所不敢行。言人人所不敢言。挺身以犯天下之忌諱。其志可嘉。其誠可感。義至公而理至純也。

悲夫南海康氏。當世知名之士也。痛中国之失其所以為國者。倡設保國之會於京師。京師士大夫謗之者有人。仰之者無人。建租界不敢言是會之果能保國與否。抑吾聞之英名士墨哥利曰。國之強者其民多過於剛。國之弱者其民每過於懦。吾願中国之尚有強國之民之風也。

⑩ 同前 上66—68葉 王栻主編 前揭書 第1冊92—95頁

昔英人赫胥黎著書名《化中人位論》、大意謂：人与猕猴為同類、而人所以能為人者、在能言語。蓋能言而後能積智、能積智者、前代閱歷、伝之後來、繼長增高、風氣日上、故由初民而野蠻、由野蠻而開化也。此即教學二事之起点。

⑪ 同前 上73葉—74葉

⑫ 同前 下11葉—12葉

- ⑬ 同前 下12葉-13葉
- ⑭ 1) の史料などにより作成したが、国聞報そのものを見ていないが、中間的なものとなった。
- ⑮ 王拭主編 前掲書 427頁
- ⑯ 嚴復『天演論』吳序 上海商務印書館 1931年
- ⑰ 蘇興『翼教叢編』155-162頁 台湾國風出版社 中華民國59年
- ⑱ 湯志鈞『戊戌變法人物伝稿上冊』179、186頁 中華書局 1982年
- ⑲ 高田淳 前掲書 144頁、西順藏、島田虔次編『清末民初政治評論集』501頁 平凡社 1971年

第四章 第二節 第八項

- ① 湖南課吏館に触れた主な史料、論文には以下のものがある。
 梁啓超『戊戌政變記』
 唐才常、譚嗣同等撰『湘報類纂』
 湖南省志編集委員会 前掲書
 小野川秀美 前掲書
 湯志鈞『戊戌變法人物伝稿』
 佐々木保子 前掲論文
 林能士 前掲書
 楊天石『黃遵憲』(中国近代史叢書所収) 上海人民出版社 1979年
 拙著
- ② 本論文第二章第二節第四項参照
- ③ 本論文第四章第二節第四項参照
- ④ 梁啓超前掲書 311~323頁
 紳權因當務之急突然他日辦一切事舍官莫屬也即今日欲開民智開紳智而假手於官力者尚不知凡幾也故開官智又爲萬事之起點官貧則不能望之以愛民官愚則不能望之以治事聞……彼胸中曾未有地球之形狀曾未有歐洲列國之國名不知學堂工藝商政爲何事不知修道養兵爲何政而國家又不以此考成大吏又不以此課最……故課吏堂不可不速立
- ⑤ 唐才常、譚嗣同 前掲書 682-686頁
 照得課吏館之設。欲使候補各員。講求居官事理。研修吏治刑名諸書。……
- ⑥ 同前 549頁
 一於府城中央。備房一所。仍名爲課吏館。
- ⑦ 湖南省志編集委員会 前掲書 155頁
 陳宝箴、黃遵憲等根据梁啓超的建議、于一八九八年二月(光緒二十四年二月)籌備設立、湖南課吏館。
- ⑧ 林能士 前掲書 82頁
- ⑨ 唐才常、譚嗣同 前掲書 549頁
 なお、この史料に見える佐貳とは、州同県丞等であり雑職とは、庫大使、税課大使等でいずれも正印官の補助をなすものである。
 一、館中設總理一員。專司課吏一切事務。

一、設提調一員。以候補知府充。凡撰擬文稿支發銀錢管理器具各事。均歸提調辦理。設理事委員一名。以佐貳雜職充。歸提調差遣。

一、於館中設一問治堂。聘請品學兼優才識素著者二三人。作為館長、住居館中。以襄助總理考課各事。

⑩ 同前

一、館中各課、現分為六類、一曰學校。(凡造士育才之法、均歸此類。)二曰農工。(凡務財訓農勸工興業之法、均歸此類。)三曰工程。(凡治道路通溝洫修城池之法、均歸此類。)四曰刑名。(凡考律例清訟獄處罪犯之法、均歸此類。)五曰緝捕。(凡盜賊會匪棍惡一切查緝之法、均歸此類。)六曰交涉。(凡通商游歷傳教一切保護之法、均歸此類。)

⑪ 同前

一、館中設書藏一所、所有分課各類之書、有古籍、有時務、有總論、有專書、有圖有表、有書目、一一咸備、以供各員取閱。

⑫ 同前 550頁

一、凡至館學業者、無論同通州縣佐貳雜職、願習何項、即自占一類、或兼二類三類、亦聽其便、到提調處自行註冊。

⑬ 同前 550—551頁

一、既占某類、願閱何書、即由提調向書藏領取、發交該員閱看。

一、所閱之書、各員應自行用筆點識、並將所見、識於書眉、每日呈問治堂查核、查畢交還。

一、各員應設札記簿二本、由館中領取所看何書、或有疑難未解之端、或有推闡義理之處、即用行書繕入札記此、札記各、備二本、每日呈送問治堂批答、呈送第二本、即領回第一本。

一、問治堂館長、於各員札記、逐日批答、有專答、專就其所問難陳述者而答之、有通答、通論此事之是非得失而答之、所有通答、另飭人鈔錄、貼挂堂中、俟後彙聚成篇、再行選擇刊布。

一、堂中另設待問櫃一器、各員除所習本業、既於札記中批答外、凡館長貼示之通答、及同僚札記之專答、有所疑難、或有所闡發、可另取堂中待問格紙、陳其所見、投入櫃中、以待館長批答。

一、在館學習者、每日應於午前九點鐘到館、閱看書籍、呈領札記、即於此時謁見館長、當面請益、至十二點畢業。

一、各員閱看之書籍、自繕之札記、聽其回寓、自行肄業、如有願在館中學習者、亦聽其便、館中別有書室一所、聽其自攜紙筆、就案查閱。

⑭ 同前 551頁

一、問治堂館長、每日於十點鐘起、接見各員、至十二點鐘散席、各員之札記、館長之批答、即於此時面交。

一、總理應間日到館現定日期、每月以初二初四初六初八初十十二十四十六十八二十廿二廿四廿六廿八三十、為到館日期。

一、總理到館日、准於每日十點鐘到、十二點鐘散、即於此時會同館長、接見各員。

一、總理到館、所有各員之札記、館長之批答、即於此時送閱、總理立將某類某條、隨時摘出、面詢某員、視其答辭、以考其學業。

⑮ 同前 551—553頁

一、館中考課、用積分之法、分為三類、一曰勤業、就其到館之時刻、閱書之卷帙、札記之條數、取其

執業之有恒、請益之無倦者、一曰善問、就其札計待問札、取其發言之精審、求理之深切者、一曰進益、就其所學取其志趣之奮發、才識之開敏者。

一、積分之法、另編一表、註明某官某人所讀何書、將上開三類、列入表格、其勤業善問二類、每日由館長填註、進益一類、每凡由總理會同館長填註、即照鈔一分呈送 撫憲查核。

一、館中積分之法、每月以九十分為合格、每日填註之一類、以三分為則、多不踰六分、(如勤業一類、每日到館有定時、無曠課、准註一分、閱書能過十篇、點識均如法者、准註一分、札記能繕出一條以上百字以上者、准註一分、如善問一類、除所問不切不審者不註外、平常註一分、善者註二分、尤善者註三分、) 每月合計通算。(如此類不及分、彼類有溢分者、或今日不及分、而明日乃有溢分者、) 踰九十分者是為溢分例得獎勵。

一、每月既將館課分數註冊、呈送 撫憲、即照表榜示堂中、每三個月大考一次、稽核各員溢分之多寡、以定給獎之厚薄。

一、每年大考四次、每大考一次、獎銀一千兩、統計各員溢分之數、即照分數攤算銀數、以分給各員。(假如各員溢分之數、合計溢至二千分、即係如一分應得銀五錢、假如某員溢至一百分、即係某員應得銀五十兩、無論多寡、概照此攤算、)

一、每六個月再請 撫憲、及各司道到館彙考一次、將各員溢分及不及分者、總核註冊、分別等第、列作六等、一上上、二上中、三上下、四中上、五中中、六中下、將姓名官職等第榜示館門、並飭知通省道府州縣各衙門。

⑩ 同前 553頁

一、凡在省候補現有差委人員、為職事所羈、未便按日到館、如有願就館學習者、亦許其自占一二類、取閱書籍、繕送札記、由館長批答、其應註分數、通照上章一律辦理、另由總理分別傳見、雖所溢分數、不給獎銀、仍照分註冊、由總理將冊按月呈送 撫憲、或應留差、或應調缺、統由 撫憲查核定奪。

一、所有外府州縣現任實缺人員、如有願占某類、閱何書、自繕札記、寄到館中者、館長亦一律批答。

⑪ 同前

一、所有現任實缺各府州縣、如有將該地方應改之書院、應修之水利、以及訓農勸工捕盜緝匪刑名疑難之案、交涉應付之、方稟請總理核示者、亦分別批答、或有將該地方何項應興之利、何項應革之弊、其民情習俗如何、官役積弊如何、原原本本、切實稟陳者、並可由總理另稟 撫憲 核辦理。

一、無論何項人員、如有能講求時務、指陳利弊、繕稟條陳、確係切實有用者、總理另行延見、另稟 撫憲察核辦理。

⑫ 同前 554頁

一、館中另有館規、凡到館學習者、均須遵照、有犯規者、即記過、每記過一次、即扣減分數二分。

⑬ 同前

一、館中應用款項、暫將舊日課吏館所支之款、分別撥用、一概由提調收發。

一、現擬聘請館長三人、每位支歲修銀八百兩、一切夫馬飲食之費、由館長自備、此項支銀二千四百兩、如係京朝官、或他省紳宦、擬另行酌送盤川銀兩。

一、館中獎銀、每大考一次、支銀一千兩、合共歲支四千兩。

一、提調月支薪水銀四十兩、理事委員、月支薪水銀十兩、此二款合共支銀六百兩。

一、館中一切費用、由提調酌擬、呈總理核定、按月支領。

一、開辦之始、應先購備各類書籍圖表、擬酌支銀一千兩。

② 同前

一、現將館中原領款項、分別支用、如有不敷、再稟請 撫憲酌撥、所有館中未盡事宜、或將來有應改章程、再隨時隨事、稟請 撫憲核辦。

③ ①の史料より作成した。

④ 梁啓超 前掲書 318頁

他日雖過分割而南支那猶可以不亡此會之所以名為南學也當時所弁各事南學會實隱寓衆議院之規模課吏堂實隱寓貴族院之規模新政局實隱寓中央政府之規模。

⑤ 林能士 前掲書 84頁

第四章 第三節 第一項

① 保国会を取り上げた主な史料、著書等に次のものがある。

康有為 前掲書

中国史学会主編 『戊戌変法』（四）

梁啓超『戊戌政変記』

康有為著・狭間直樹訳「京師保国会集会での康有為の演説」（西順藏・島田虔次編『中国古典文学大系五八、清末民国初政治評論集』平凡社 昭和46年所収 161—

湯志鈞『戊戌変法史論』

湯志鈞『戊戌変法史論叢』

湯志鈞『戊戌変法人物伝稿』上・下

小野川秀美 前掲書

胡浜 前掲書

范文瀾 前掲書

王爾敏 前掲書

三石善吉 前掲論文

② 知新報五四 光緒二十四年四月一日

国聞報 光緒二十四年閏三月十七日

中国史学会主編 『戊戌変法』（四） 399頁

甲午東師大辱、国瀕於危、識時俊傑、怒然擣憂、乃創立強学会於京師、被議而罷。由是会中士夫、屏而益強其学、近且迫而求保国之方、爰於京師再立保国会、其愛国之忱、当為天下所共与矣。

③ 本論文第一章第二節参照

④ 梁啓超『戊戌政変記』 154頁

京師士夫、頗相応和、於时会試期近、公車雲集、御史李盛鐸乃就康謀、欲集各省公車開一大會、康然之、是為保国会議之初起。……到会者二百余人、……是日公擬保国会章程三十条。……

⑤ 国聞報 光緒二十三年閏三月二十九日

中国史学会主編 『戊戌変法』（四） 406頁

- ⑥ 中国史学会主編 『戊戌变法』（四） 399頁
- ⑦ 梁啓超『戊戌政変記』 168頁
開此会之意、欲令天下人咸發憤國恥。因公車諸士而摩厲之、俾還而激厲其鄉人、以効日本維新志士之所為、則一舉而十八行省之人心皆興起矣。
- ⑧ 中国史学会主編 『戊戌变法』（四） 406頁
- ⑨ 梁啓超『戊戌政変記』 154頁
康復欲集官之有志者、李不謂然、後卒從康議、於三月二十七日在粵東會館第一集。……
- ⑩ 康有為前掲書 143頁によれば、3月22日とある。
- ⑪ 例えば、中国史学会主編『戊戌变法』（四）56頁の梁啓超の「林旭伝」では、福建省の士夫達が福建省會館に集まって閩学会を組織している。
- ⑫ 中国史学会主編 『戊戌变法』（四） 399頁
自京師上海設保國總會、各省各府各縣皆設分會、以地名冠之。
- ⑬ 同前
- ⑭ 同前 400頁
- ⑮ 同前 401頁
- ⑯ 同前
- ⑰ 同前 400頁
- ⑱ 同前
各地方會議員隨其地情形置分理議員約七人。
- ⑲ 同前
- ⑳ 同前 400—401頁
- ㉑ 同前 403頁
- ㉒ 同前 400頁
- ㉓ 同前 401頁
- ㉔ 同前 403頁
- ㉕ 同前 400頁
- ㉖ 同前 403頁
- ㉗ () 内は、筆者の註。本項のこれ以後の () は、すべて同様である。
- ㉘ これは、高山彦九郎正之（1747—1793）であろう。ちなみに高山は、久留米に逗留中、憂憤の余り、自刃したと伝えられている。
- ㉙ 同前 407—412頁
- ㉚ 梁啓超『戊戌政変記』 159—161頁
- ㉛ 中国史学会主編 『戊戌变法』（四） 413—416頁
- ㉜ 同前（四） 143頁
康有為 前掲書 45—46頁
二十五日再集於崧雲草堂。二十九日再集於貴州會館、人皆逾百數。
- ㉝ 中国史学会主編 『戊戌变法』（四） 403頁

- ③ 梁啓超『戊戌政變記』 146頁
戊戌三月康有為李盛鐸等同謀開演說懇親之會於北京。大集朝士及公車數百人。名其會曰保國。
- ④ 中國史學會主編『戊戌變法』（四） 406頁
- ⑤ 梁啓超『戊戌政變記』 154頁
- ⑥ 中國史學會主編『戊戌變法』（四） 403—405頁
- ⑦ 范文瀾 前掲書 306—308頁
- ⑧ 中國史學會主編『戊戌變法』（四） 143頁
康有為 前掲書 45—46頁
樓上下人皆滿、聽者有泣下者。……當是時公車如雲、來見者日數十、座填塞、應接不暇、分日夜之力、往各會宣講、客來或不能見、見亦不能答拜、多有怨者。
- ⑨ 中國史學會主編『戊戌變法』（四） 403—405頁
- ⑩ 梁啓超『戊戌政變記』 146頁
後李盛鐸受榮祿之戒。乃除名不與會。已而京師大譁。謂開此會為大逆不道。於是李盛鐸上奏劾會。御史潘慶瀾黃桂鑾繼之。皇上概不問。而謠譏之起。徧於全部。
- ⑪ 同前 158頁
中國史學會主編『戊戌變法』（四） 417頁
- ⑫ 本論文第1章第2節
- ⑬ 梁啓超『戊戌政變記』 168—169頁
而各省志士紛紛繼起有保浙保漢會等、自是風氣益大開、士心亦加振厲、不可抑遏矣。

第五章 第二節

- ① 湖南省の社會經濟的問題に触れた主な史料、著書、論文に次のものがある。
- 中國史學會主編『戊戌變法』（一—四）
『湖南歷史資料』 1958年 三、四期
湖南省志編集委員會編 前掲書
梁啓超『戊戌政變記』
譚嗣同、唐才常、熊希齡主編『湘學新報』（一—四）華文書局版 民國55年
唐才常、譚嗣同等撰 前掲書
小野川秀美 前掲書
林能士 前掲書
中村義『辛亥革命史研究』 未來社 1979年
佐々木保子 前掲論文
深澤秀男「變法運動と陳寶箴」『史境』32頁 1996年
- ② 唐才常、譚嗣同等撰 前掲書 232頁
- ③ 同前 233頁
則多有湖南所已弁者。如礦務輪船學堂練兵之類。或尅日開弁者。如學會巡捕報館之類。或將弁而尚有阻力者。如鐵路之類。或已弁而尚須變通擴充者。如鈔票製造公司之類。

- ④ 同前
一日開馬路。通全省之血脈。則全之風氣可以通。全省之商貨可以出。二日設勸工博覽場。取各府州縣天產人工之貨聚而比較之。工藝精者優加獎勵。……
- ⑤ 同前 261頁
- ⑥ 同前 262頁
限地者先指定一地。為試行之始。行不善則已。不善於一地。余無不善也。今以湖南而論。任舉一岳州。則自岳州始。且自岳州之下水釐金始。
- ⑦ 同前 270頁
- ⑧ 同前 271—272頁、湖南省志編集委員會 前掲書 第一卷 137—138頁
撫部陳公。憫吾湘人。慨然思有以易之。於是命寶善成公司。創造電燈。自於撫署試然之。數月而善。乃令民間皆得同其利。取費又甚廉賤。由是長沙一城。自學堂報館以達通衢之大商肆。咸入夕炳炳然矣。
- ⑨ 湘報類纂 273—279頁
- ⑩ 同前 288—290頁
- ⑪ 同前 294—297頁
- ⑫ 同前 267—270頁
- ⑬ 同前 284—287頁
- ⑭ 同前 290—294頁
- ⑮ 湘學新報 1280頁
- ⑯ 同前 1281頁
今若能就此路建造、以避灘河之險、與北江水路通連一氣、洋貨可以內灌、土貨藉以外輸、其行過之地、有平和棉花、……唐村之苧麻、郴州煙茶木植油煤、廣東之塩果、可以養路、其余由湘潭運出之貨、有茶梗爆竹、每年運脚所省不下數十萬。
- ⑰ 同前 1292—1293頁
淺水輪船、但能拖帶小駁其行已緩、而通商之埠、遠在漢口、漢口以下、即須改載大船、是小駁受輪船之益淺、而漢口享埠之利大也、今莫如在湘中設一埠頭、……吃水三尺以上之輪船、則但行走支河、附屬於鐵路公司、益兩山之間有川、兩川之間有山、……故開鐵路者必直行以貫通山川之隔而小輪橫行支水、以接受鐵路貫通之貨而達幹河、所謂水路經而鐵路緯也。
- ⑱ 中村 前掲書 47—52頁
- ⑲ 湘報類纂 603—605頁
- ⑳ 同前 605—607頁
- ㉑ 同前 610—612頁
- ㉒ 同前 612—613頁
- ㉓ 同前 723—725頁 湖南省志第一卷 158—159頁
- ㉔ 湘報 725—726頁 湖南省志第一卷 159—160頁
- ㉕ 湖南省志委員會 前掲書 126—129頁 第二次修訂本 147—150頁
- ㉖ 中村 前掲書 48頁
- ㉗ 湖南省志委員會 前掲書 134頁 第二次修訂本 146—147頁 深澤秀男「変法運動と陳宝箴」

㉔ 同前 137-138頁 第二次修訂本 151-152頁

㉕ 同前 161頁 第二次修訂本 174頁

㉖ 同前。

這些話、確實代表了湖南維新派和群眾對創辦小輪公司的意見、他們認為行駛輪船、不僅促進了商品的流通、而且更重要的、可以掌握這一經濟利權、以免日後為外國侵略者所掠奪、這正是當時新興資產階級企圖掙脫外國侵略者的束縛而發展資本主義的期望。

㉗ 同前 164頁

1898年7月(6月)、巡撫陳寶箴設立製造槍彈兩廠、關於所需經費、根據鹽斤加價成案、每斤折收加價銀一厘四毫、每年約銀十餘萬兩。又奏請清政府將上海機器製造局原議定購機器稅款、改撥一部分給湖南、以購制機器。

㉘ 同前

他們基本上掌握了蒸熬樟腦的技術、……“湖南向多樟腦樹、榔、永、辰、澧為尤富”、具有蒸熬樟腦的優越條件、他們“邀集股本銀一萬兩、設立湖南化學製造公司、暫用土法、先行蒸熬樟腦、俟著成效、即當購機器、以次擴充”。……

㉙ 同前 165頁

張本奎等所設立的化學製造公司、雖然規模較小、且技術低劣、產量有限、但這在當時說來、乃是一種新生事物、對以後化學工業的發展、是有一定影響的。

第六章 第一節

① 溝口雄三 前掲書 48頁

第六章 第二節

① 遊歷會、格致學會、工藝學會、紅十字會については、地域の確定ができなかったので載せることができなかった。

第六章 第三節

① 張自牧『蠡測卮言』(『小方壺齋叢書』十一帙の六)

② 湯震『危言』卷一 議院 光緒十九年

……今日之言業亦不可為不廣矣……

③ 陳虬『治平通議』卷六 東遼条議

……虬愚以謂泰西富強之道在有議政院以通上下之情……

④ 同前

⑤ 同前 卷五 救世要議。

……縣各設議院大事集議而行……

⑥ 鄭觀應『盛世危言』議院上 光緒十九年

……議院者公議政事之院也集眾思廣眾益用人行政一秉至公法誠良意誠美矣……

⑦ 同前

……欲藉公法以維大局必先設議院以固民心……

小野川秀美 前掲書 102—103頁。

同前 110頁。

⑧ 陳熾『庸書』外篇卷下「審機」

……泰西之所長者政中国之所長者教道与器別体与用殊……

⑨ 梁啓超著・小野和子訳注 前掲書

小野川秀美前掲書 124頁。

同前 126頁。

同前。

⑩ 梁啓超著・小野和子訳注 前掲書 269—270頁。

⑪ 王夫子『繁辭上伝』

無其器則無其道

⑫ 譚嗣同「上歐陽養齋師書」(『譚嗣同全集』所収 292頁)

……則道必依於器而後有實用、果非空漠無物之中、有所謂道矣。……

⑬ 范文瀾 前掲書 313頁。

譚嗣系也是代表開明的地主富商要求轉化為資本家、他們沾染官僚文士習氣較少，而文着手開辦鉅務、迅速可獲得大利、所以在思想上比較康梁系激進。

⑭ 同前

甲午戰爭更刺激他發憤提唱新學。當時江南製造局訳出的科學書、広学会訳出的外國歷史、政治及耶穌教神學書、供給他新知識、加上旧的儒學、老莊學、構成變法的理論體系、成為維新運動時期第一流思想家。

⑮ 譚嗣同『仁學』下(『譚嗣同全集』所収 55頁)

⑯ 譚嗣同「上歐陽養齋師書」

⑰ 譚嗣同『仁學』下(『譚嗣同全集』所収 56頁)

……生民之初、本無所謂君臣、則皆民也。民不能相治、亦不暇治、於是共舉一民為君。……

⑱ 同前

……夫曰共舉之、則旦必可共廢之。君也者、為民辦事者也；

⑲ 小野川秀美 前掲書 266頁。

⑳ 范文瀾 前掲書 314頁。

㉑ 北京強学会については、本論文第4章第2節第1項参照、上海強学会については、第2節第2項参照

㉒ 本論文第4章第3節参照

㉓ 南学会については、本論文第4章第2節第4項参照

㉔ 梁啓超『戊戌政變記』 261頁

各國變法、無不從流血而成、今日中国未聞有因變法而流血者、此國之所以不昌也。有之、請自嗣同始。